

真実かどうか（2）

前回に続いて、“真実かどうか 常に正直と親切を旨としているか”について「奉仕こそ我がつとめ」という本の中から一つの話をご参考までに引用します。

あるデパートの社長が倉庫の中を見回してみると雨合羽が沢山売れ残り山のようになっています。中には、湿気のため黴が生えて使い物にならない物もありましたが、まだ十分使える物もありました。社長は役員会でこのことを話し、宣伝部長を同席させ、新しい商品を仕入れたいので売れ残りの雨合羽を早く処分し倉庫を空にしたいと述べ、売り捌きの為の広告を出すよう指示しました。部長は部に帰り役員会での話しをそのまま伝えたところ、担当者は売り出しの前日に、次のような広告を出しました。

「当社の倉庫には売れ残りのレインコートが山積みになっています。中には、とても使い物にならない様な物もあります。多少傷のあるものもあります。中には新品同様のものもございます。とにかく、当社はこれを出来るだけ早く処分して空にし、新しい商品をそこに入れたいと希望しています。その為、〇月〇日〇時から、このレインコートの特売をします。低廉に致しておりますのでどうかお買い求め下さい。売り切れたときはお許し下さい」と。

2～3日後、出張から戻ってこの広告を見た社長は激怒しました。早速、宣伝部長を呼びつけ「こういう下らん広告をやる馬鹿が我が社にいたのか。何というごまだ。こんな奴は即刻首だ」と広告を手にして怒鳴りつけました。

部長は、「ああ、それでしたか。それでしたら社長、倉庫に行ってください。その品物はもう全部売りつくされてしまいました。あの広告のお陰です。お客様は、当社が正直であることを評価して下さった結果だと思えます」。

似たような話をもう一つ、大村北RC発行の「ロータリーの心を尋ねて」の中からご参考までに引用します。

備前の池田光正候の家来に山川重郎佐衛門という小録で貧乏な侍がいました。ある年の暮れ、光正候へ伺ったとき、候から「大変寒さが厳しいが子供たちには、ちゃんと着るものを着せているか」とお尋ねがありました。重郎佐衛門は、「ハイ、いささか手元不如意でございますれば十分着せてやることも出来ず、難儀いたしております」と答えました。すると候は、小判20両を紙包みにして、上に「20両」と書いてこれを重郎佐衛門に与えました。彼は、押し頂いて家に帰り数えてみると21両あったので、翌日、出仕した時に、その一両を持って行ってお返ししようと思いました。候は、その正直な事を褒めて「それはそなたの幸せというもの、納めておくがよい」と。それから、数カ月後、候より彼にお納戸役が命ぜられました。信用のおける男と見込んでの処遇でした。